

平成27年3月15日(日)

老球の細道127号

## 「勝ち」へのこだわり

会津バスケットボール協会理事長 室井 富仁

子供の頃色々な遊びをした。スポーツはもちろん、トランプ、ビー玉、メンコ、相撲、町内の道路を走るリレー、かくれんぼ等。すべてにおいて勝ちにこだわって必死になって遊んだ。負けることは許されない。卑怯なこと以外はあらゆる手段を尽くして勝てるように工夫した。負けたら勝つまで勝負して勝ったらやめた。次に負けるのが恐かったから。そんな子供の頃の習性が大人になっても残っている。教え子たちはえらい迷惑だったろう。

A高校のコーチの頃、夏休みに入ると必ず合宿をした。基本的に5泊6日のスケジュールで、朝、午前、午後、夜と4部練習をした。選手達の体力も強靱なものを要求されるが、すべてつきっきりで指導するコーチの私もしんどかった。

この合宿では夜練習は8時からスタートでゲームが中心だった。夏休みで帰ってきたOBや地元の会津クラブのメンバーがたくさん集まった。20分ゲーム(当時は20分前後半ゲーム)で現役が勝つまでやった。ある年はなかなか勝てなくて、夜中の2時まで続いたことがあった。勝つまで終わらないと決めた以上はやり遂げなければならなかった。

その時のOB、会津クラブチームも素晴らしかった。選手がかわいそうだからと一切手抜きをしないで、最後まで本気で戦ってくれた。選手は泣きながら最後まで戦い、夜中の2時にやっと勝つことができ練習終了となった。そして翌朝6時には何事もなかったかのように朝練習が始まった。

スポーツは勝つために努力をしなければならないと思っている。勝つために努力するところから、ゲームを楽しむことができるし、人生のイロハも学ぶことができる。勝とうと思わない相手と対戦しても全然面白くない。勝つために一生懸命努力したところから、勝っても負けても色々なことを学ぶ。そもそも、スポーツを定義すると、「身体を使って、勝敗を競う、ゲーム形式の運動」とある。第一の目的は楽しむことであり、楽しむためには勝敗を競うことが特に重要な要素になる。

しかし昨今、勝てないとすぐあきらめてしまう。何度も同じような負け方をしても悔しがらないで平気な顔をしている。「楽しむ」ということを、無理をしないで、ムキにならないでそこそこで満足することと勘違いしている風潮がなきにしもあらず。毎日の練習は、自分たちよりも弱いチームを倒すためにやっているのではない。現状を維持するためにやっているのではない。大げさにいうと自分に奇跡を起こすためにやっている。

スポーツには二種類の「勝利」がある。一つは、競う相手に対するもの。相手の攻撃に耐え、相手の守備に頑張って攻撃をしかける。これをせずに勝利することはのぞめない。もう一つは、弱い自分に勝つ、克己である。練習や試合の中で色々な困難に出会っても、あきらめないで、それを克服する。この二つの「勝ち」を目指す過程で、スポーツから楽しみと人生を満喫することができる。

スポーツ評論家広瀬一郎氏は言う。「勝つこと」に価値がなければ、「勝つこと」を目指すのは無意味である。「勝つこと」の価値を知らないで「勝つこと」を目指すのも同様に無意味である。「勝つこと」のみを優先すること、手段を選ばずに勝つことは、「勝つこと」の価値を壊す行為で、全く馬鹿げた行為である。まさに「勝ち」は「価値」なり。